

# 庄内農家の友

Vol.996 / R7.3.1

2025

3

March

全農  
もっと近くに

URL <https://www.zennoh-yamagata.or.jp/>  
E-mail: [sysmail@yt.zennoh.or.jp](mailto:sysmail@yt.zennoh.or.jp)



表紙写真コンクール入選 鶴岡公園の夜桜 齋藤 弘男さん（鶴岡市切添町）

## Contents

- P2-3 終刊にあたって庄内5JA組合長からの寄稿
- P4 創刊号を振り返る
- P5 庄内農家の友編集に携わって
- P6-7 写真コンクールの歴史を写真とともに振り返る
- P8 編集委員より／発行人より

JA全農山形

発行所／全国農業協同組合連合会 山形県本部（JA全農山形）  
〒990-0042 山形県山形市七日町三丁目1番10号 TEL023-634-8133  
発行人／長谷川 直秀  
印刷所／庄内農村工業農業協同組合連合会

## 最終号の発刊にあたって

庄内農業振興協議会委員長

（山形県庄内総合支庁産業経済部次長（兼）農業技術普及課長） 佐藤 和則

「庄内農家の友」は昭和24年（1949年）5月15日に「増産にいそしむ農家の友」として創刊以来、76年間の歴史に幕を下ろし、996号をもって閉刊といたします。これまで御愛読いただきました庄内地域の農家の皆様、原稿を執筆していただきました関係機関の皆様、JAグループの皆様にご感謝申し上げます。

昭和20年（1945年）に終戦を迎え、22年（1947年）に農業協同組合法、23年（1948年）に農業改良助長法が公布され、時を同じくして「庄内農家の友」は創刊されました。農協と県の各農事試験場（現：各研究所等）・農事改良普及所（現：農業技術普及課）は「庄内農家の友」の歴史とともに歩んできました。

「発刊の辞」には、戦後の“農業の粗放化”“地力の消耗”“指導陣の弱体化”を憂うとともに“農業会時代の風を存して一般経済流通面に重点を置き、生産指導面についてはやや軽視された嫌いなしとは言いえない”ことから「庄内農事改良協会（現庄内農業振興協議会）」を設立し、「庄内農家の友」を創刊したと記されています。

この間に米づくりの技術は、保温折衷苗代からハウス育苗に、手植えから乗用機械田植えに、動噴から無人ヘリに、手刈りからコンバインに、杭掛けから機械・施設乾燥調製に大きく進歩し、庄内地域の米の単収も約6俵から約10俵に増加しました。

「庄内農家の友」は技術情報誌として、貴重な農業技術の情報源として農家の方々に活用されてきました。時代は流れ、発刊当時憂慮されていた“指導陣の弱体化”は、農協に多数の優秀な営農指導員が配置され、技術情報についても農業技術普及課や農協から年々の生育状況に合わせ、地域ごとに発行されるようになりました。また、情報の伝達手段もホームページ（HP）や電子メール、LINEなど多様化し、タイムリーに伝達できるようになりました。こうした時代の変化を背景に、庄内農業振興協議会では、庄内地域全域を対象に紙媒体（近年はHP）で発行される「庄内農家の友」は一定の役割を果たしたという結論に至りました。

一つの時代が幕を閉じることとなりますが、それは新しい時代の幕開けを意味するものと考えています。引き続き、県の各機関とJAグループは、連携しながら庄内地域の農業振興を支援してまいりたいと考えております。今後ともよろしくお願いたします。

長年にわたり、御愛読いただき誠にありがとうございました。

（敬称略）

団体名	役職名	氏名
山形県農業総合研究センター 水田農業研究所	所長	横山 克至
山形県農業総合研究センター 養豚研究所	所長	須藤 英紀
山形県病害虫防除所 庄内支所	支所長	中場理恵子
庄内総合支庁 産業経済部	農業振興課	課長 長谷川慎一
	農業技術普及課	課長 佐藤 和則
	農業技術普及課 産地研究室	室長 安孫子裕樹
	酒田農業技術普及課	課長 廣野 直芳
庄内農協技術員会	課長	守屋 聖一
	会長	五瓶 正人
	副会長	五十嵐雄二郎
JA	JA鶴岡 営農販売部	部長 加藤 政志
	JA庄内たがわ 営農販売部	部長 成澤 真一
	JAあまるめ 営農販売部	部長 土屋 仁
	JA庄内みどり 営農販売部	部長 佐藤 正徳
	JA酒田市袖浦 営農販売部	部長 加賀 徹
JA全農山形	最上・庄内地区センター	部長 岡部 仁幸
	米穀部 米穀庄内推進室	室長 小藤 章子
	園芸部 園芸庄内推進室	室長 齋藤 努
	畜産部 畜産販売課	課長 長科 章
	営農企画部 営農支援課	課長 山澤 洋平
営農企画部 営農支援課		伊藤 綾里

## ～ご挨拶～

これまで長い間皆様にご愛読いただいておりますこの「庄内農家の友」は昭和24年5月15日に第1号が創刊されました。現在は毎月1回Web上での発行ですが、創刊当初は毎月1日と15日の2回発行であり、その編集委員には当時の山形県立農事試験場庄内分場長や山形県立農事試験場砂丘試験場長にお願いし、編集事務局は「庄内販売農業協同組合連合会」が務めました。

その後事務局は、「庄内経済農業協同組合連合会」に移り、現在では「全国農業協同組合連合会山形県本部」となり、今日に至りました。

昭和24年の創刊ですから、今年で76年目と長い歴史をもった広報誌ということになります。

歴史を振り返ってみますと、発刊の目的が米の増産に向けた技術の紹介や普及ということで、当時としては大変珍しい稲作に特化した専門誌でありました。これまで数々の栽培技術や生産振興策の紹介が

なされています。

時代が進むにつれ、稲作だけではなく園芸畑作物にも目が向けられ、さらには農畜産物の販売動向なども掲載されるようになり、庄内地域の農業専門誌として、農家組合員の皆様へ、盛りだくさんの情報を発信して参りました。

しかし、昭和・平成・令和と時代が移り変わり、ネット環境が発達した現代では、情報はいつでも誰でもどこからでも取り入れることができることになり、「庄内農家の友」として一定の役割を終えたのではないかと考えております。

最後に、今までご愛読いただきました生産者・関係者の皆様、また執筆編集に携わった皆様への心からの感謝と今後の庄内農業のさらなる発展を祈念申しあげ、最終号の発行にあたりご挨拶いたします。

全国農業協同組合連合会 山形県本部  
県本部長 長谷川 直秀

# 「庄内農家の友」終刊にあたって

組合 同業協同農協市農鶴岡  
代表理事組合長 保科 互

昭和24年初刊発行から実に76年間、庄内農業の発展・技術振興への機関紙であった。その与えた影響について、多大なる敬意を表したい。さて、昭和24年いわゆる終戦後、どんな時代背景であったか。これより遡る事70年前、明治維新という農民開放があり、その次にまさに戦後に農地解放が始まる。地主制度から自作地農家制度に変わってゆく。そして、農家人口が急増してゆき、それまで馬耕・牛耕といった動力が次々機械に変わってゆく時代である。当時まで蒸気機関が動力の主力であったが、それが小型動力機(電動・石油燃料)に変わってゆき始める。

農政はどうだったか。「米日本一表彰」制度が始まり、農林省研究機関が発足。食料増産五カ年法・農業機械促進時法制定。まさに増産に向けてイケイケどんどん。この12年後農業基本法制定、10年後自主流通米発足、そして9年後水田農業再編対策いわゆる転作が始まる。

昭和38年ササニシキ平成3年はえぬきがそれぞれデビュー、庄内平野を彩ってきた。品種乱立からササ一辺倒、そしてはえぬきへバトンタッチ、つや姫・雪若丸とより味を求める品種構成になってくる。

振り返れば、実に多様な76年間であろう。米の大増産時代に始まり、減反政策に左右され、今は海外も視野に入れての米政策。そして、園芸・畜産も農業振興の柱の一つとして挙げられる。まさに「農家の友」として大海原を航海してきた。ご苦勞様でしたと記し、筆をおきたい。

組合 同業協同農協市農鶴岡  
代表理事組合長 海藤 喜久男

本誌の終刊にあたり、長年のご尽力に心より感謝と御礼を申し上げます。本誌は、庄内地域の農業を支える貴重な情報源として、営農に役立つ知識や最新の動向、生産者の声を伝えてくださいました。農業技術の紹介や経営の工夫、地域の取り組みなど、現場のリアルな声が詰まった内容は、農業に携わる者にとつて大きな支えとなりました。

時代の変化とともに情報発信の手段が多様化し、本誌がその役割を終えることは誠に残念ではあります。本誌がこれまで届けていただいた多くの情報や、誌面を通じて生まれたつながりは、今後も庄内農業の発展に生かされていくことと思います。本誌を通じて学んだ知識や得られた気づきは、これからの営農にも大きな影響を与えることでしょう。特に、生産者の方々の経験談や実践的な情報は、日々の営農において貴重な指針となりました。

また、本誌が果たしてきた役割は、単なる情報提供にとどまらず、農業者同士をつなぐ架け橋でもあったと感じています。多くの農家の取り組みや地域の活動を知ること、刺激を受け、新たな挑戦へと踏み出すきっかけを得た方も少なくないのではないのでしょうか。その意味でも、本誌の存在は非常に大きなものでした。

本誌の終刊は寂しい限りですが、これまで培われた経験や情報が、今後も農業者の皆さまの支えとなることを願っております。長年にわたり、地域の農業を応援し、有益な情報を届けてくださった発行元の皆さま、そして関係者の皆さまに、改めて深く感謝申し上げます。

最後になりますが、発行に携わられた皆さまの今後のご活躍と、庄内農業のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。

組合 同業協同農協市農鶴岡  
代表理事組合長 佐藤 一彦

## 黒票箋の誇りと庄内米

昭和24年に第一号が発刊された「庄内農家の友」は戦後食糧

不足のなか国内の食糧増進に農業者の栽培技術の向上とそれを支える指導者の育成を目的に発刊された事と推察されます。初版発刊の辞において庄内販売農業協同組合会長庄司勲作氏は各試験場、農事改良普及課の集結と一体となった指導体制を確立し庄内農業の発展を願うとあります。その願い通り指導技術の研鑽と農家の実践により国内有数の米産地になることが出来ました。改めて先人の尽力に感謝と敬意を表すものです。

さて、私が就農した昭和60年には自主流通米制度のなか価格も上昇経過で麻袋の米袋を閉じると最後に黒い票箋を付けました。文字は白抜きで

組合 同業協同農協市農鶴岡  
代表理事組合長 田村 久義

このたび令和7年3月号の発刊をもって終了となります。広報紙「庄内農家の友」の終刊にあたり一言ご挨拶を申し上げます。

「庄内農家の友」につきましましては昭和24年5月に第一号が創刊され、以来76年の長きにわたり、庄内地方の稲作における貴重な機関情報紙として発行されてきました。過去の紙面を拝見しますと、稲作における技術対策をはじめ、日々進化する新技術への挑戦など、稲作へ対する熱き思いや弛まぬ探求心を伺い知ることができ、まさに先人が培い庄内米の名声を高めるため、庄内が一丸となつて米づくりに精励恪勤されたことのわかる貴重な資料であり財産であります。その志は、我々現代の米づくりにおいても脈々と受け継がれてきております。

また、毎月表紙を飾っていただきましたアマチュアカメラマンによるフォトグラフは、庄内地方における季節ごとの景色の移ろいや地域の伝統行事を彩りや表情豊かに表現されておりました。この表紙に飾られた写真を通して庄内地方の知られざる四季折々の風景や地域の伝統文化を知るきっかけとなったのではないのでしょうか。「庄内農家の友」に限られた紙面でこれだけ数多くの情報が存在していたことに今以て感慨深く、その歴史を感じるところであります。今後、その思いは各JAの広報誌に受け継がれていくこととなります。

結びに第一号の発刊からこのたびの終刊に至るまで「庄内農家の友」への執筆、編集、発刊に携わっていただきました多数の関係機関、及び関係者各位に心より敬意を表すると共に、76年間の歴史に感謝と御礼を申し上げます。終刊にあたってのご挨拶とさせていただきます。

組合 同業協同農協市農鶴岡  
代表理事組合長 五十嵐 良 弥

「庄内農家の友」の最終号の発刊にあたり一言ご挨拶申し上げます。

「庄内農家の友」を昭和24年からの長きにわたり、地域に寄り添った情報を発行し続けられました事に厚く敬意を表します。

「庄内農家の友」は、庄内の農家の重要な情報源となり、掲載される内容は、時に同じ農業を営む上での励みや刺激となり、新たな栽培技術の振興の原動力となるなど、庄内の農業を営む人々にとつて重要な役割を担っております。今は、SNSが普及し、簡単に情報が手に入られる時代です。しかし、「庄内農家の友」のように、JAの垣根を越えての情報を取り入れることは、このような時代でもそう簡単にできることはありません。そういった情報は、各JAの財産と言えます。そのような面からも「庄内農家の友」が果たしてきた役割は大きかったと言えます。

現在、かつて発展途上国と言われてきた国々が近代化し、世界人口が増え、食糧難が懸念される中、今や日本の農産物は、世界で注目される商品となっております。今後、庄内の農業が末永く発展し続けることを願ってやみません。

結びに、これまで庄内の農家と共に歩み、取材や紙面の作成にご尽力いただきました皆様に厚く感謝申し上げます。

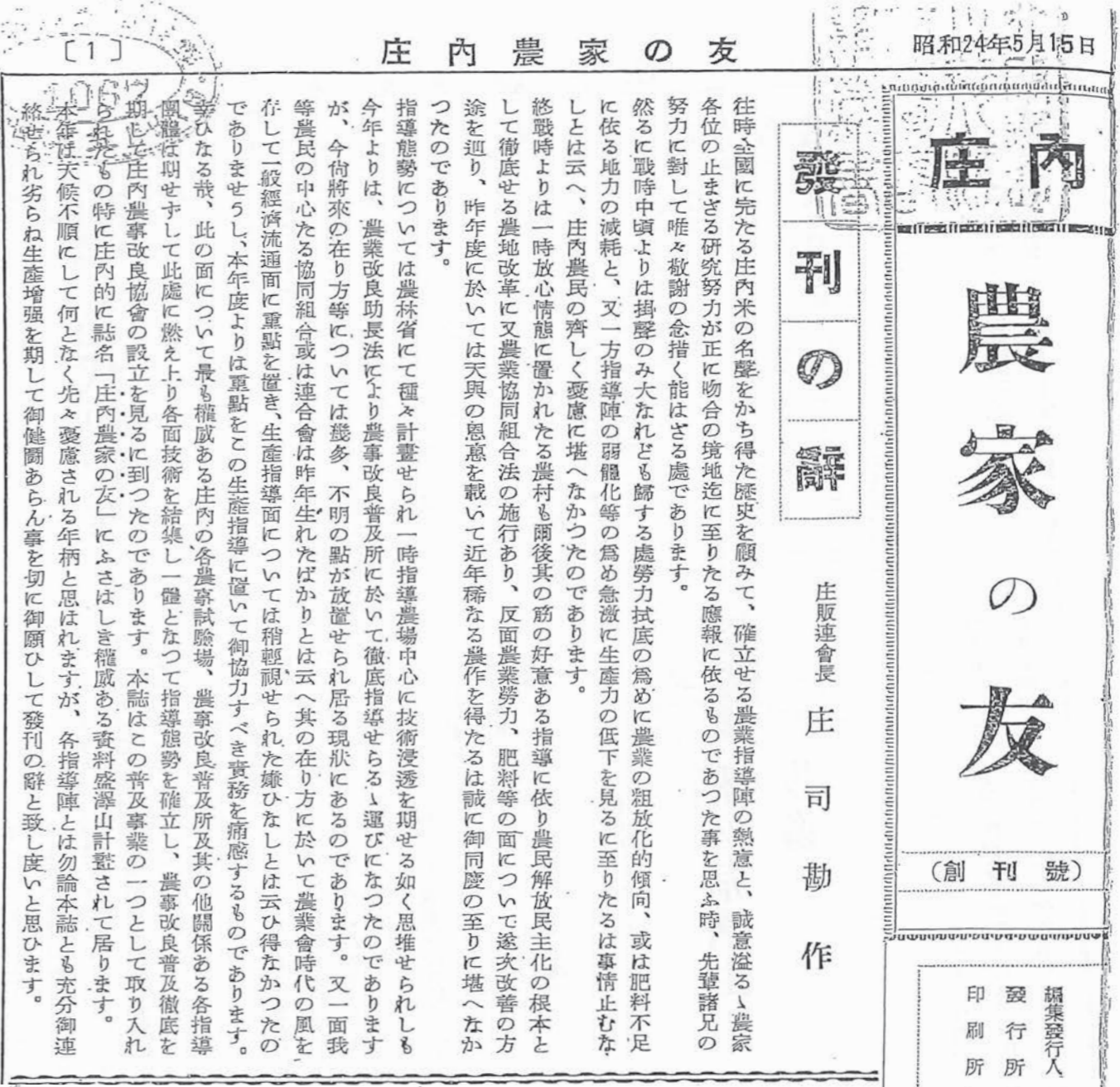
庄内米と書かれ始めは気に留めてなかった黒票箋でしたが数年後に米卸関係の方に話を伺う機会があり、あの黒票箋は日本で一番である証と生産者のプライドであると聞きしその後は誇り高く感じましたのです。ササ・コシ戦争と言われた時代、品質収量を常に最高の物を目指した私達の勲章のように感じたものです。

しかし、現在は生産調整が恒常化し高品質多収より経営的判断のなかで米作りをする時代です。米作りの職人的気質は影をひそめても庄内の地で栽培普及に努めそれを実践し日本一と賞賛された誇りは次世代に語り継ぎ残さなくてはなりません。今一度庄内産ブランドのお米の復活と「庄内農家の友」で培った歴史ある技術が情熱ある栽培者に継承されることを願ってやみません。

最後にこれまで発刊にあたり尽力頂いた全ての方々に厚く感謝申し上げます。

# ～特集～創刊号を振り返る

# 「庄内農家の友」を振り返って



## 庄内農事改良協會の委員は左の通りであります

- 山形縣立農事試験場庄内分場長一名 農事主任 二名
- 農林省農事改良實驗所鹿島試驗地長 一名
- 山形縣立農事試験場砂丘試驗地長 一名
- 田川地方事務所經濟課技官 二名
- 飽海地方事務所經濟課技官 一名
- 庄内農事改良普及所主任 九名
- 庄内地區農事改良委員會長 九名
- 庄内販賣農業協同組合連合會常務役員 二名
- 庄内購買農業協同組合連合會常務役員 一名
- 學識経験者若干名 事務局は庄内販賣職員擔當致します

編集發行人 庄内販賣農業協同組合連合會  
發行所 庄内農事改良協會  
印刷所 田川農村工業農業協同組合連合會印刷部

往時全國にわたる庄内米の名譽をかち得た歴史を顧みて、確立せる農業指導陣の熱意と、誠意溢るる農家各位の止まざる研究努力が正に吻合の境地迄に至りたる應報に依るものであつた事を思ふ時、先輩諸兄の努力に對して唯々敬謝の念措く能はざる處であります。

然るに戰時中頃よりは掛聲のみ大なれども歸する處努力拭底の爲めに農業の粗放化的傾向、或は肥料不足に依る地力の減耗と、又一方指導陣の弱體化等の爲め急激に生産力の低下を見るに至りたるは事情止むなしとは云へ、庄内農民の齊しく憂慮に堪へなかつたのであります。

終戦時よりは一時放心情態に置かれたる農村も爾後其の筋の好意ある指導に依り農民解放民主化の根本として徹底せる農地改革に又農業協同組合法の施行あり、反面農業努力、肥料等の面について遂次改善の方途を辿り、昨年度に於いては天與の恩恵を載いて近年稀なる農作を得たるは誠に御同慶の至りに堪へなかつたのであります。

指導態勢については農林省にて種々計畫せられ一時指導農場中心に技術浸透を期せる如く思惟せられしも今年よりは、農業改良助長法により農事改良普及所にて徹底指導せらるゝ運びになつたのであります。今尙將來の在り方等については幾多、不明の點が放置せられ居る現状にあるのであります。又一面我等農民の中心たる協同組合或は連合會は昨年生れたばかりとは云へ其の在り方に於いて農業會時代の風を存して一般經濟流通面に重點を置き、生産指導面については稍輕視せられた嫌ひなしとは云ひ得なかつたのであります。

幸ひなる哉、此の面について最も權威ある庄内の各農事試験場、農事改良普及所及其の他關係ある各指導團體は明せずして此處に燃え上り各方面技術を結集し一體となつて指導態勢を確立し、農事改良普及徹底を期して庄内農事改良協會の設立を見るに到つたのであります。本誌はこの普及事業の一つとして取り入れられたもの特に庄内に誌名「庄内農家の友」にふさはしき權威ある資料盛澤山計盤されて居ります。

本年は天候不順にして何となく先々憂慮される年柄と思はれますが、各指導陣とは勿論本誌とも充分御連絡され劣らぬ生産増強を期して御健闘あらん事を切に御願ひして發刊の辭と致し度いと思ひます。

第17代編集委員長  
(元山形県水田農業試験場長・庄内農業技術普及課長)  
**大 瀧 光 一**

編集最後となつた900号(平成29年3月)は定年退職と機を一にして奇しくも最後の記念号となり、今回最終号への執筆機会を頂いたことに不思議な縁を感じつつ振り返ります。

本誌の編集委員長は歴代藤島氏の農業試験場長であつたため、慣例に従い水田農業試験場長として着任した平成23年4月から引き継ぎました。しかし発刊から60数余年を経て紙面内容は稲作主体から他品目まで幅広く、編集会議では違和感を覚えたのも事実です。

水田農業試験場では水稲・大豆以外の現場の情報に接する機会がほとんどないため、委員長は農業技術普及課長がふさわしいと持論を展開し、編集委員の皆さんの賛同を得ました。ところが

平成26年4月農業技術普及課長となり、立場を変えて定年までの連続6年間委員長を継続することになったのでした。

「農家の友」の在り方検討

時代の流れとともに農家が求める情報は多岐多様化し、その伝達方法も目覚ましい進歩を続けてきました。平成10年代初めJA庄内みどりでは組合員向けの技術情報を定期的に発行するようになり、他のJAや普及課でも同様に定期的な技術情報の他緊急情報を配布するよう体制も整い、タイムリーでより地域に密着した情報が農家へ伝わるようになってきました。月刊誌である本誌は総合情報誌としてオンライン化されたものでしたが、迅速性・地域性という観点からはその優位性は相対的に低下していったことは否めません。

このため私が編集委員長時代、本誌の在り方や存続について話題となつた折には問題提起をさせて頂き、その議論の一環として紙面の体裁を横書きとし題字も変えたのですが読者の皆さんは覚えていますか(平成26年4月・翌3月号)しかし、この変更は不評で平成27年4月号からは縦書き紙面に戻りましたが、題字はそれ以前と違つた字体で現在に至つていられることにもお気づきでしょうか？

農家も指導者も育てた「農家の友」

発刊当時は稲作情報誌として月2回のペースで農家に配布され、迅速かつ画期的な情報伝達手段として全国的にも類をみなかつたものと思われまふ。500号記念特集(昭和58年11月号)には編集長も歴任された大沼清氏(当時庄内経済連技術主幹)が「干天の慈雨のことく農家に受け入れられた」と記載されています。その後稲作だけでなく他分野の技術情報の記事も増え農家の技術レベルアップに大きく貢献したことはま

ちがいありません。

また、従前執筆者のほとんどはベテランの研究者・普及員が中心で、JA職員は現地事例の紹介などだけでした。しかし平成15年7月からは「編集会議を」庄内農業振興協議会と改めたことを契機に、若手の普及員やJA営農指導員の執筆機会も増え、農業技術指導者としての人材育成に一役買ったと言つても過言ではありません。

「創刊の志」をさらなる高みへ

800号記念特集(平成20年11月)には、大沼氏が「庄内稲作の歴史そのもの」とのコラムを書かれています。本誌はJAグループはじめ県や庄内の農業関係者が克明に記録した現場の生き証人にならなければなりません。稲作に限らず「庄内農業の歴史そのもの」とも言えるでしょう。

デジタル版を経て最終号を迎えることは大変残念ですが、それぞれの組織や立場の方々が「庄内農家の友」創刊の志をさらなる高みへと昇華させ、庄内農業の発展に尽力されることを切に願います。

これまで編集・発行に携わられたすべての皆様、本当にお疲れ様でした。

元庄内経済連職員  
(庄内町在住)  
**奥 山 賢 一**

あれから四十年の月日が経ちました。編集に携わり多忙だつた日々が懐かしく感じられます。それまで全く広報制作などを経験した事も無い私が、総合企画室に異動となり、先輩の指導を受けながら「庄内農家の友」の編集に関わりました。

農業分野の知識も無かつたため、多くの農業分野の方々から、特に、農試庄内支場・砂丘地農試・養豚試験場・家畜保健衛生所・各普及センター等、山形県の技術者指導の先生方からは様々な

指導を頂きました。

毎月、頂いた原稿を解読しながら紙面を作る日々。数か月毎に行われる編集会議では、メンバーの先生達に、月毎の執筆テーマや執筆者を決めて頂き、その方針に添つて仕事を進めました。一方、組織独自のページでは、毎月庄内一円を廻り多くの農家を訪ねて取材し執筆を行いました。今思えば、その1つ1つの積み重ねが、その後の仕事に大いに活かせるきっかけになつたと感じます。

その1つは組織にとつて「情報発信」の大切さでした。マスメディアへの広報周知活動を通して、農業サイドの取り組みを記事にしてもらう事。新たに部署のみならず「広報懇話会」を企画。毎月、地元の記事クラブのメンバーに参加出席いただき、記事にして欲しい情報をプレステレビや新聞に取り挙げてもらう取り組みを行いました。

更に「人的ネットワークを広げる」大切さにも気付かされました。農業青年達との出会いを通して、人的な輪が広がりました。この出会いは、広報とは直接関係は無いのですが、後年、「庄内あすなろ塾」として活かせる事になりました。九州や北海道を巡り、その地の先達から「希望の種」の見つけ方を学んだこの研修では、庄内一円の農業に携わる志ある青年達との人的ネットワークが出来上がり、今でも庄内各地で、かつて一緒に旅した皆さんから声をかけて頂いています。

また、「迷わないで門をたたけ」ということ。まずは迷つていないで、とにかく行動を起こしてみようという事でした。取材でも積極的に相手にコンタクトを取りました。新規事業だつた文化講演会では「耕す文化の時代」著者である木村尚三郎先生を招く事になりその担当を務めることに。東大に知り合ひがいる訳でもなく、今のようにSNSが発達している訳でもなく、思わず電話番号案内に「東大は何番ですか」と問い合わせ、あちこち電話をして何とか木村先生に辿り着き、無事に庄内にお迎えすることが出来ました。

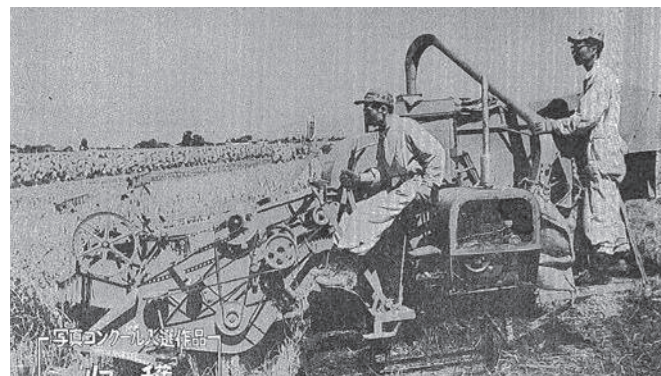
今回で最終号を迎える「農家の友」に心から感謝の気持ちを伝えたいと思ひます。これからも「庄内農家の友」で培つた精神で人生を頑張つて行く(う)と思ひます。ありがとうございました。

あれから四十年の月日が経ちました。編集に携わり多忙だつた日々が懐かしく感じられます。それまで全く広報制作などを経験した事も無い私が、総合企画室に異動となり、先輩の指導を受けながら「庄内農家の友」の編集に関わりました。

農業分野の知識も無かつたため、多くの農業分野の方々から、特に、農試庄内支場・砂丘地農試・養豚試験場・家畜保健衛生所・各普及センター等、山形県の技術者指導の先生方からは様々な

# 庄内農家の友 写真コンクールを振り返って

庄内農家の友写真コンクールは、昭和37年第1回の募集を開始し、それから毎年開催され長い歴史を刻んできました。ここではその貴重な画像とともに振り返りたいと思います。農作業風景など、時代を感じさせる作品ばかりです。どうぞご覧ください。



昭和38年 収穫



昭和44年 刈り取り



昭和40年 昼食



平成12年 秋晴れ



昭和41年 柿の木のせん定



平成28年 藤沢かぶの焼き畑



平成27年 大根収穫作業



平成8年 メロンの収穫



平成14年 閉牧の日



昭和50年 ブタの散歩

## 読者の写真コンクール

- ◆『農家の友』では、こんど農村をテーマにした写真作品の一般募集をおこないます。
- ◆これは、『農家の友』才1頁目を写真編集することになり、この作品を読者の皆さん方から募集することになったものです。
- ◆作品は農村をテーマにしたものであれば、どんな内容でもけっこうです。
- ◆たのしいご家庭なり、村なりのレクリエーション、行事或は農業のスナップ、農村の風景などなんでも応募して下さい。

第1回目の募集案内



写真コンクール入選作品  
種まく頃  
藤島町 鈴木昭男

入選作品第1号 種まく頃



昭和49年 除草する若い人



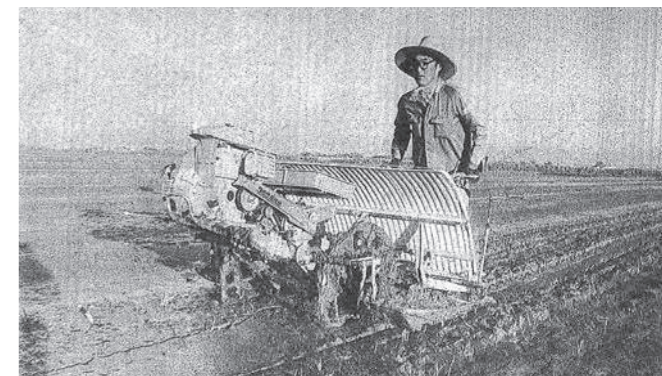
写真コンクール入選作品  
共同田植え  
藤島町 林田敏

昭和45年 共同田植え



写真コンクール入選作品  
共同防除  
藤島町 栗田末太郎

昭和44年 共同防除



昭和49年 田園を走る



平成28年 防除作業



令和4年 田植日和